

切となるのですから、従つて戸主権も無くなる譯  
であります。こゝに一寸疑問となることがあつて、  
世の中によくある例です。そは、右の場合にをき  
まして、入婿が出てしまへば、前戸主であつた女  
が戸主となることは明であります、若し其際子  
供があつたとすればどうせう。この時も女が戸  
主になると云ふやうな人もありますが、それは大  
間違で、その子供が相續規定によつて、戸主とな  
るのであります。

第四項 戸主が婚姻又は養子縁組の

取消に因り其家を去りたる

とき、

婚姻又は養子縁組によつて他家に入つたもの  
が、何かの事情で其家を去らねばならぬ時は、そ  
の家を去ると共に、戸主権は消失するとは見安

とであります。が、こゝに一つ入り組んだ場合が  
起つて参ります。婿養子縁組に因りまして、家の  
娘と婚姻して其家を相續し戸主となつた時に、夫  
婦の縁を切つたとしたなら戸主権は有るものでせ  
うか。考へて見ますに、この時は單に夫婦別れを  
した迄で、未だ養子縁組は其儘であります。すれ  
ば、この婿は依然として其家の養子としてゐるの  
ですから、戸主権も其儘存在するものであります。  
之れで第二章は終りましたから、次ぎには第三  
章を述べます。

貞一の日記(承前) (明治卅六年) (五月生男兒)

そのの母

五月廿日 牛乳をモーテツチ、ドーズ、オシツコ

ナイノと問へば、ナイノなどいひならふ

五月廿二日 今日 靴をはきて 外にて遊ぶ

犬を見れば 遠くから いゝこゝと撫る真似  
をなし、近づき来れば 逃げ出す、母の傘を杖  
の様にして持ち、トンくとつきながら歩む

五月廿六日 カーチャン、トーチャンをいひなら  
ふ

五月廿七日 オンボンくといつて、茶棚を指さ  
す故、御盆の事かと思ひしに、トンボの畫の茶

碗の事なりと、  
今日は魚なき故、鶏卵三個を予ふ、

五月廿八日 卅一日の満二年の誕生日にといふ筈

なりしも、天氣都合もあればとて、繰り上げて  
今日寫眞屋宮内に行く、父母安田さん、君恵さ  
んとカビ子にての五人、父母と三人、貞一一人

のと三度うつす、知らぬ所にて、余りチャホヤ

おもちゃなど出して、機嫌とる故、びつくりし

た様な顔にてうつす、かへり上野公園にて遊ぶ、  
五月廿九日 オンデ(下ニ降ルコト) チャン(茶

碗) バンをいひならふ、  
安田さんに畫をかいてもらふ事好きになりそ

れも バン 牛乳のびん、茶碗などを喜ぶ  
五月卅日 外であそんで歸る時、玄關にてオーイ

といふ、父の真似をするなり、  
五月卅一日 小原先生に行き見て頂く、体量一〇

一一〇、  
成績誠に宜し、牛乳、魚肉共に分量を減ぜず

つゝけて予ふべしと ほめられて歸る  
今日は誕生日なれば、従兄の名八さんや従姉の

春枝さんや、渡部の伯母さんが 静子さんをつれて  
お祝に來て下さる、夜になりては君枝

さんも御出になる、いろ／＼のおもちやや、下駄や、美しいシヤツを皆様から頂く、貞一は大喜びにて、活潑にはね廻りて饒舌る、にーちゃんねーちゃんなど覺える、安田さんに、御祝ひに頂いた繪本の中、象と獅子の名を覺えたり。六月一日 今日十時の御飯をすませ、安田さんにつれられ 本郷のきみえさんの家へ遊びに行く 隣の四つばかりの女兒と直に親しくなりて戯る、太田の原に行き、池をまわりて、オイケく／＼とくりかへす、宅へ歸りて後、何所へいつたのとさけば、オイケと答へまたてふ／＼といふ 蝶々が御池の傍に居りしとの事なり、六月三日 キシヤ、デンシヤ、ボチ等を覺えたり、六月四日 ホネ、(魚ノ)マテ／＼コタ／＼などいふ、午後一時半 晝寝さめし後、左の腕如何

せしやシヤイ／＼といつて動さず、おやつ喰べし後は 尙痛がつて、少しも動かさず 依つて樂山堂へ連れて行く、診察をうけしも 別に異状なしと歸宅後は、不思議にも、全く治せし様なりしが七時過ぎになりて又 シヤイ／＼といひ、一寸さわつても聲をあげて泣く、如何せんかと 心配し居る中、眠りし故明日の事にせん と其儘になし置きたり、六月五日 腕の痛みは全く治したる様なり、六月六日 今日例の如く 便通余り柔く 小水も余り黄色き故、小原先生の許へ使を走らせて薬を頂く、午後より西片町十番地はの十九號へ轉居す 初め皆より先きに 安田さんと二人にて、車にのりて本郷に行く、途中大學の前まで來りしとこ

ろ、先日、君枝さんの許へ行つた時、こゝを通りしを覺え居りしものか、ねーちゃん、おいけくといふ、新宅にゆきしに、オンモくウチなどいひて、元の宅へ歸り度様子なりしも、後には馴れて、安田さんとかくれんぼなどして遊ぶ

六月八日 此頃は中々交際家になりて、外へ出し時、姉さんや兄さんの人を見ると、木の葉をつて渡したり、オイデくサヨナラくなどをする、近所の誠之小學校にて、君が代を唱ふをき、大變好きになりたり、  
六月九日 蝶々はときけば、フンくと鼻唄の様に拍子も調子も正しく唱ふ、たい詞が唱へぬ丈なり、雁々も、ア、にて唱ふ、クワツくも正しく唱ふ、

六月十一日 雨の事を、アネくといひ、ミ、をニニといふ、マムモの音は容易に發音したりしも、ミとメは、中々むつかしそうなり、  
父母と市川氏の所に、遊びに行き、赤ちやんを見て、タツケく立たせやうとする。  
六月十二日 繪本の、豹、月をムーンなど覺えたり

六月十四日 君が代の歌を、ヲハといふ  
粥を一度だけ飯に代ゆ、  
朝食 牛乳二〇〇瓦、パン二切  
晝食 飯一椀、魚肉、十五匁、牛乳一〇〇瓦  
かやつ 牛乳二〇〇瓦、パン一切  
夕食 粥一椀、魚肉十五匁、牛乳一〇〇瓦  
(パンは一日の分量四半斤なり)  
六月十六日 粥を二度とも飯に代ゆ、

人をくすぐる事を覚え、母など 足袋をぬげば  
すぐ足をくすぐる

子供の不思議

沼田 笠峰

青葉若葉の滴る木蔭に座つて、可愛らしい稚児  
は、赤く熟した林檎をかじりながら、ふと不思議  
の念を小さき胸に浮べた。この世の光を浴びてか  
ら、まだやう／＼五ツ年ばかりの幼い身にも、解  
きたい謎は様々あると見える。先づ第一、不思議  
で不思議でたまらないのは、あの大空に高く懸つ  
て居る所の、大きな／＼火の玉なのです。

『毎日々々、青空を徐ろに歩いて、夜が来ると、  
どこか見えない處へ行つてねんねする、あの火の

やうに燃えて居る玉には、大方鎖が附いてるんだ  
らう。だけれども、その鎖はどんな所から始まつて、  
どこにくつ附いて居るのか知ら。そしてもし、そ  
の鎖が途中で切れて、大きな火の玉が落つちて  
来たら如何だらう。それを大變、きつと人も鳥  
も草も花も、みんな焼け死んぢまふねエ。イヤ  
／＼、人は焼け死んでも鳥は死な、いだらう。…  
……でも鳥には羽があるから、すぐあの冷やりし  
た青空へ翔けて行つて、柔らかな白い雲の中へか  
くれてしまふに決つてる。あそこへ行けば、何が  
来たつて大丈夫、焼けつこなしさ。』

『どうかして、私も鳥になりたいなア。そした  
ら、すーつと高い所まで飛んで行けるから、あの  
白い雲が何で拵らへてあるのか、見てくるものが